34

「元気」と「原気」考

王　明強
南京中医薬大学中医国学研究所

「元気」と「原気」は中医学基礎理論における重要な術語である．古代の医家は昔から二者を混同し，二者の区別を論じるものもない．現在，学界では，二者は全く同じというわけではないと主張している学者はいるが，ほとんどの人は一字の違いだけと考える．では，なぜ二者は同じ意味なのに字が違い，且つ長い間混同されているのか．

古典資料を調べてみると，「原気」という単語が頻繁に使われるようになったのは明より以後である．たとえば，「元気」をキーワードとして『四庫全書』子部医籍を検索すると，検索結果数は746であり，ヒット数は4221である．古くは漢代から，近くは明清までの64の医書を含む．一方，「原気」をキーワードとして検索したところ，結果数は33で，ヒット数は72である．『難経本義』，『普済方』，『玉機微義』，『鍼灸問対』，『赤水元珠』，『証治準繩』，『奇経八脈考』など，13の医籍を含む．その中，元の滑寿の『難経本義』以外，全て明より以後の医書である．『難経本義』の初版は元の官刻本であるが，刊行されて間も無く元は滅んだ．清になると，僅か数巻しか残っていない．四庫本も明刻本に基づく．沈澍農教授が敦煌医薬文献を整理・研究する時，ロシアに所蔵される敦煌残巻ДX11538aは古写本の『難経』であると判断した．その中では，伝世本に「原気之別」とある箇所は「元気之別使」となる．従って，『難経』では「原気」はもともと「元気」であった．

また，明初では避諱によって「元」を「原」に置き換えた例が多くある．学界では，明初において「元」を避諱する理由に関しては二説がある．一つは，元朝の国号を避けるという．陳垣は『史諱挙例・悪意避諱例』において，「避諱は悪意より出づるもの有り……『野獲編補遺一』また云わく，「明初の貿易文契，呉元年・洪武元年の如きは，倶に原の字を以て元の字に代わる．蓋し民間は元人を追恨し，其の国号を書するを欲せざるなり，と.」とある」と述べる．もう一つは朱元璋の元を避けるという．しかし，明は後期を除き，避諱に関してはかなり緩い時代であった．陳垣の『史諱舉例・明諱例』に，「明は元の後を承け，避諱の法また甚だ疏なり……『野獲編補遺二』また云わく：避諱の一事，本朝最も軽し，と.」とある．これはまさしく「元気」を「原気」に置き換え，且つ長い間混同される理由であろう．

実際，歴史上「元」を避諱した幾つかの例がある．なかでは，明らかに避諱である例を挙げておく．開元元年，唐玄宗李隆基の尊号「開元神武皇帝」の「元」を避諱するため，当時名前の中の「元」を省いたり，避けたりする人がいった．宋太宗趙炅の息子九人は全員，名前に「元」の字があったが，四人目の商恭靖主・元份（初めて冀王と封ぜらる）は，『宋史・畢士安』に，彼の原名は「士元」であるが，左拾遺兼冀王府記室参軍に改任した後，「王の諱を犯し，遂に改む」とある．元刻本の『黄帝八十一難経纂図句解』（南宋・李駉）においては，「原気」という言葉がすでに出現する．これに対して沈澍農教授は，後人の改訂でなければ，『難經』の中の「原気」は唐代，あるいは宋代に初めて使われるようになった可能性があり，もしくは元代において，前述した明の人が元の人に対する「避悪諱（悪い諱を避ける）」という概念がすでにあった可能性あると考える．さらなる考察が必要であるが，「原気」という術語が明より以後大量に出現し，使われるようになったことは，明の避諱と密接に関連しているに違いない．

（翻訳：成高雅　京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明専攻）